



## 友を送る

(財) 地方公務員等ライフプラン協会  
(前常務理事)

吉田 哲

「や

あ、ヨシダ、元気？ 久しぶりなのに、こんな電話で残念なんだけど、実はヤマダ（仮名）が亡くなったんだよ。今朝早くだって。奥さんから連絡があった。お葬式は……」。訃報は突然やってくることが多い。この知らせは大学時代の運動部のチームメイトが亡くなったことを別のチームメイトが知らせてくれたものだ。亡くなった友人とは学生時代に親しくしていたばかりではない。彼は大学卒業後関西に行ったが、出張などの折には時間を見つけて東京の私の職場をたびたび訪ねてくれた。あるいは待ち合わせをして何回も一緒に酒を飲んだ。その元気な姿しか頭に残っていないから、本当に驚いてしまう。

今回特に残念だったのは、彼が闘病中にお見舞いに行けなかったことだ。今年の年賀状に彼が昨年春に喉頭ガンの手術をしたこと、その後経過は順調で職場に復帰したことなどが記されていた。それを読んで「たいしたことはなさそうだ」と思ったのが間違いだった。そろそろ彼が東京に来るかなと思っていたところだった。告別式に飾られた何枚かの生前の写真から生きている彼の声が聞こえるような気がして、もう一度会いたかったと心の底から思った。

四十歳代の半ばから友人知人など特に親しかったり関わりの深かった人たちの訃報に接することが多くなった。私は地方の出身だし転勤が多かったので遠方の友人知人が多い。日頃は友人やお世話になった方々になかなかお会いできないのが実情だ。多くの方が闘病生活の後亡くなるのだからせめてその間にお見舞いに行けたらと思うのだが、訃報をいただいて初めて知り、お見舞いできず残念に思うことがこれまでもあった。

知らせが有ってからでは遅すぎるのだ。お葬式に出るくらいなら（最後の別れも大事なことだが）元気な間に会いに行こう。そして大いに楽しい時間を過ごしたり、お世話になった方々には心から感謝の気持ちを捧げたい。



©SASEBO